

武蔵野日曜聖書講筈

愛は歩く

――マタイ伝第9章1～13節――

1993年7月11日

小池辰雄

汝の罪ゆるされたり 起きて歩め 超在・遍在・内在 愛は歩く 二重構造 星の旅 遣れる者

【マタイ9】

1 イエス舟にのり、渡りて己が町にきたり給う。2 視よ、中風にて床に臥しおる者を、人々みもとに連れ来れり。イエス彼らの信仰を見て、中風の者に言いたもう『子よ、心安かれ、汝の罪ゆるされたり』3 視よ、或る学者ら心の中にいう『この人は神を瀆すなり』4 イエスその思いを知りて言い給う『何ゆえ心に悪しき事をおもうか。5 汝の罪ゆるされたりと言うと、起きて歩めと言うと、いずれか易き。6 人の子、地にて罪を赦す権威あることを汝らに知らせん為に』――ここに中風の者に言い給う――『起きよ、床をとりて汝の家にたえ給え』7 彼おきて、その家にかえる。8 群衆これを見ておそれ、斯る能力を人にあたえ給える神を崇めたり。

9 イエス此処より進みて、マタイという人の収税所に坐しおるを見て『我に従え』と言ひ給えば、立ちて従えり。10 家にて食事の席につき居給うとき、視よ、多くの取税人・罪人ら来りて、イエス及び弟子たちと共に列なる。11 パリサイ人これを見て弟子たちに言う『なに故なんじらの師は、取税人・罪人と共に食するか』12 之を聞いて言いたもう『健やかなる者は医者を要せず、ただ病める者これを要す。13 なんじら往きて学べ「われ憐憫を好みて、犠牲を好まず」とは如何なる意ぞ。我は正しき者を招かんとにあらで、罪人を招かんとて来れり』

● 汝の罪ゆるされたり

1 イエス舟にのり、渡りて己が町にきたり給う。

「己が町」というのはガリラヤ湖の北の方のカペナウムのことです。あそこを伝道の根拠地にしておられた。

2 視よ、中風にて床に臥しおる者を、人々みもとに連れ来れり。イエス彼ら



の信仰を見て、中風の者に言いたもう『子よ、心安かれ、汝の罪ゆるされたり』
 キリストという方は、ちゃんとその人の存在を歴史的にも見える方なんです。中風の者を連れてきた。「子よ」というのは親しい言い方です。

「心配するな、安心しろ。汝の罪はゆるされた」
 と。その病気の原因が何かそういったことであつたかも知れません。多分そうでしょう。病気が治るよりも大事なものは、罪の赦されることです。魂が健やかにされると、肉体もまた自然に健やかになる。そこで、

「心配するな。罪はゆるされた」
 と言われた。「ゆるされた」という原語は現在形で「ゆるされる」と書いてありますが、「ゆるされた」で結構でしょう。罪を赦すことのできる者は他にいない。

3 視よ、或る学者ら心の中に『この人は神を瀆すなり』
 「学者ら」というのはいわゆる教法師で、旧約の堅いご連中です。パリサイがその中に入っています。

「この人は神を瀆す。罪を赦すのは神さまの他にできないのに、『罪赦されたり』
 なんてとんでもない話だ」

というわけです。旧約の観念からいうとそういうことなんです。キリストが本当の救主であることを知らないものだから。キリストはイザヤ書53章の預言の成就者です。十字架に架かって、罪の赦しを、贖罪を完全になさるわけですけども、もう既に地上にあつて十字架を負っているキリストは、

「罪は赦された」

とはつきり言えるわけです。本当の権威をもつた愛の心です。

それだから、旧約的な考えの学者たちが、

「神を瀆している。神さまの他に罪を赦すことはできないのに、なんだ、この人は」というわけです。

旧約でも、イザヤなんかの預言者の言葉を読めば、

「我らの病を負い、罪を負うもの」

という、キリストへの預言が既にあるわけですけども、そういうことが分かってない。

●起きて歩め

4 イエスその思いを知りて言い給う『何ゆえ心に悪しき事をおもうか。5 汝の罪ゆるされたりと言うと、起きて歩めと言うと、いずれか易き。』

この疑問の言い方は常識的には、

「起きて歩め」

と言った方が難しく、



「罪赦されたり」

の方が易しいと普通は思うけれども、実は、「罪赦されたり」と言うことはできないから、本当はこつちが重いんです。

ペテロがヨハネと一緒に、

「起きて歩め」

と言って、あしなえ跛者を立たせて歩ませた。あれはキリストの力で、内側にいたでいてるものを、

「わが中にあるものを汝に与える」

と言って、キリストの力でもって跛者を立たせた。使徒行伝の始めの方に出ています。ところが、「立ちて歩め」よりも「罪赦されたり」の方が、言葉を語ることは易しいようだけれども、実はこつちの方が難しい。誰もできない。難しい易しいどころでない。

「罪赦されたり」

は誰もできない。救主でなければ言えない言葉です。だから

「神を瀆す」

と言ったんです。

6 人の子、地にて罪を赦す権威あることを汝らに知らせん為に』

とはつきり言われた。

「人の子」

というのは暗号です。救主のことを「人の子」という言い方をする。ダニエル書7章にでている。これは隠語なんです。本当は

「神の子」

です。

我々はキリストの前に平伏すと無条件にゆるされる。実はもう十字架で赦されている。十字架で贖われているんだから。十字架というものはそれだけの大変なものです。赦されていることを本当に受けとると、今度は聖霊がやってくる。そのことはここには出てませんけれども。

だから、我々は躓いても転んでも、み前に平伏す。十字架の前に平伏せば、既にゆるされ、贖われ、聖霊が与えられる、その現実に入れられる。

● 超在・遍在・内在

神・キリストは超在的な存在です。絶対界におられる。であります、同時に、至る所に来られる。遍在する。超在し、遍在し、しかも内在したもう。我々の中に入ってくる。この三つの在り方は非常に大事なことです。超在・遍在・内在ということ。キリストは一緒に歩いてくださる。これは遍在の方だ。導いてくださる。しかも、その力を内在をもつて与えてくださる。超在の方が降りてきて、遍在的に、近くに前に後ろに右に左にと、そ



して今度は、内在して本当の力を与える。神・キリストは超在し遍在し内在してくださいと、
ところの驚くべき存在です。

——ここに中風の者に言い給う——『起きよ、床をとりて汝の家にかえれ』
7彼おきて、その家にかえる。

まず、罪の赦しを先にして、それから、
「もう、心配はない。家に帰れ」

と。そうしたら、中風の者がいきなり立ち上がって帰ってしまった。

8群衆これを見ておそれ、**斯る能力を人にあたえ給える神を崇めたり。**

この群衆は信仰がはつきりしている。神さまを崇めた。

●愛は歩く

今日は妙な題で

「愛は歩く」

という。その所に出かけて行って、そして、福音を伝える。正直、私は1940年から方々に、日本中と言っては大袈裟ですが、とにかく、北は北海道から南は鹿児島まで、あちらこちらと歩きました。これは、キリストという愛が歩いた。

パウロはコリント前書13章で

「愛は、愛は

と言っているけれども、あれは実は

「キリストという愛は」

ということです。キリストは愛の権化ごんげです。愛の権化が一緒に歩いてくださる。

「伝道」という言葉よりも、「愛は歩く」と言った方が非常に端的だね。そして、その中に入ってしまう。歩いて行って、相手の人の中に入ってしまう。内在する。だから、力を得る。力を得るといふことは、キリストの霊が、キリストの生命が、キリストの愛が中に入らなければ、力が出てこない。それが、この内在の世界です。非常に親しい友人関係も、

「君が僕か、僕が君か」

というような区別のないような世界、それが深い友情の世界です。それを

「刎頸ふんけいの交わり」

という。友のためには首を切られても悔いはない、という凄^{あさま}しい言葉だ。友人関係も、師弟関係も、それくらいの気合をもつてないとね。相手が躓つまずいたり転んだりしたら、担かつぎあげてやる。

「お前、ダメじゃないか」

なんて言うことはない。担いで進んで行けばいい。それが本当の友情というものだ。

「愛は歩く」



というのはそういうことです。

9 イエス此処より進みて、マタイという人の収税所に坐しおるを見て『我に従え』と言ひ給えば、立ちて従えり。

マタイというのは税吏なんだ。職業を直ぐ捨てて従った。キリストに、『我に従え』

と言われると、みなその時にそう感じたんだね、大変なひとだから、直ぐ従った。マルコ伝には「直ちに」とよく書いてある。

10 家にて食事の席につき居給うとき、視よ、多くの取税人・罪人ら来りて、イエス及び弟子たちと共に列なる。

「罪人」という言い方は、いわゆるパリサイみたい、道徳的に旧約の律法をちゃんと自分たちは知っているしまたそれを守っている、というようなことでなくて、普通の人を「罪びと」

というんです。普通の人のことです。パリサイ人は自分はエリートだと思っている。律法をよく知っていて守っているということ。

11 パリサイ人これを見て弟子たちに言う『なに故なんじらの師は、取税人・罪人らと共に食するか』

「ダメじゃないか、あの先生はおかしい。立派な人たちと一緒に食べているなら分かるけれども」

と、こういうわけだ。パリサイが言いそうなことです。

●二重構造

12 之を聞いて言いたもう『健やかなる者は医者を要せず、ただ病める者これにを要す。』

健康な者は医者が必要ないけれども、病人はこれを要する。ところが、本当の健康者はあるか、というわけだ。本当はみな病める者なんだ、精神的にも肉体的にも。病人が絶えないわけだ。病院に行くと、こんなにも病人がいるかと思うくらいだ。けれども、自分自身も隠れた病人だ。キリストは一応、

「健かなる者は医者を要せず、ただ病める者これにを要す」

と言われた。魂の世界で病んでいない者は一人もいない。そうすると、本当は肉体的にもどこかおかしいわけなんだ、現象的には見えなくても。病める者でありながら、しかも、キリストを受けとっていると、同時に健やかなる者なんです。そういう二重構造になっている。キリストの生命は冒されない。そういう健やかさが内側に、魂の中に、身体の中にある。我々、キリストを受けとっている者はそういう二重構造になっている。相対的な悩める者、病める者。それから、根源的には健やかなる者、救われている者。これが実は本



当の人間なんだ。本当の人間というのはそういう二重構造でなければダメなんです。

13 なんじら往きて学べ「われ憐憫を好みて、犠牲を好まず」とは如何なる意ぞ。

我は正しき者を招かんとにあらで、罪人を招かんとて来れり』

これは旧約のホセア書の中の言葉です。

「われは愛情をよろこびて犠牲をよろこばず。神を知るを悦ぶこと燔祭にま

されり。」(ホセア6:6)

宗教的な犠牲の儀式だの祭儀だの、そんなことが宗教ではない。本当の宗教というのは人を愛すること、憐れむことなんだ。

「神を知る」

というのは――預言者が言う「知る」という言葉は全身で受けとることを「知る」という

――頭で知るのではない。宗教的儀式をやるのが宗教ではない。具体的に人を助けたりすることが本当の宗教です。「憐憫」とはただ感情ばかりでない、実際に行動に表すことです。

福音の世界は具体性なんです、観念ではない。

「アブラハムは行為によって救われた」

とヤコブ書に書いてある。パウロの書翰には、

「アブラハムは信仰によって救われた」

とある。実は、この信仰も行為も中身は同じことだった。「しんこう」の「こう」は「仰」(信仰)ではなくて、「交」(信交)です。一つにならなければダメなんです。キリストと一つになる。

「父と我とは一つなり」

とある。

「私はキリストと一つであります」

と。一如です。だからもう、「信仰」なんて言う必要はない。

「私はキリストと一つですよ」

と言う。人間だからズレたりするよ。けれども、本質的には一つということをも本当に自覚していなければダメです。

「罪びとを招かんとて来たれり」

と。実は、本当はパリサイが一番の罪びとなんだ。己を義しとしている連中は、自己義認は罪の一番大きいやつです。自己義認で人を蔑むのは一番大きな罪、サタン的な罪なんです。

傲慢の罪です。

我々は罪びとであり病める者である。けれども、キリストにできくわすと、罪びとであり病める者でありながら、義人であり、救われたる者、健やかなる者なんです。ちゃんと二重構造になっている。

「何%が救われていて、何%がダメだ」



ということではない。全的に罪びとであり、全的に救われている。全的判断です。分析的な判断ではない。マルチン・ルターが

「クリスチャンは義人にして罪びとなり」

と言ったのはその角度の言葉です。

●星の旅

愛は出掛けて行って、人を救い助ける。それが「愛は歩く」なんです。「伝道」というと、どうも言葉ばかりになる。けれども、本当は具体的なものがそこになければいかん。相手を健やかにしたり、喜びの世界に入れたり、飢えていたら食物をあげたり、そういうのが本当の「愛は歩く」の世界です。

「喉の渴いている者に一杯の水をやれば、このことは天使がちゃんと覚えているぞ」なんてキリストが言われたでしょ。

「人の子は枕する所なし」

というのは一定の住所はもたないということです。一定の住所で寝ることをしない、自分にはそういう住処すみかはないから、招かれればそこに行って寝るし、招く人がなければ野原でも山の中でも石の上でも眠る。あれが、「人の子は枕する所なし」ということ。至る所を枕とする。ということとは、キリストにとつては至る所が神さまの懐ふところなんです。我々は至る所どこでも、そこで寝るときには、キリストの懐の中に入る。

私の詩（『霊界の星々』1998年刊）は「星の旅」なんです。これはダニエル書にある言葉から思い出した。

「さとしき穎悟者は空の光輝のごとくに耀かん。また衆多の人を義ただしきに導ける者は星の

ごとくなりて永遠とこしえにいたらん。ダニエルよ終末おわりの時まで此言このを秘し此書を封

じおけ。衆多ゆきわたの者跋涉しからん而して知識増すべしと。」（ダニエル12・3～4）

不思議な言葉だ。「知識」とは本当の智慧のこと。

「優れた者は星の如く輝く、星のごとくなりて永遠にいたらん」

という。だから、星というのは優れた存在のことです。

「ああ、この人は」

といって、私は歴史的に優れた人物を観るわけです。その中には女性もいます。そういう優れた人たちが現れてくる。それが知らない間に詩になってくる。

「優れた人は天において星となる」

という言い方をよくします。優れた人というのは、ただ偉い人ではない。名もない惨めなような人でも、魂の非常に素晴らしい人がいる。それはみな優れた人です。内容は様々です。いわゆる偉い人ではない。そういう意味では、ダンテの『神曲』やゲーテの『ファウスト』とも、私の詩はまた違う。もつと福音的です。



「隠れています神」という言い方がある。

「救をほどこし給うイスラエルの神よまことに汝はかくれています神なり。」

(イザヤ45・15)

「隠れています神に祈れ」

と、キリストが言われた。あの言葉はおそらくここから来ているね。

「隠れています」

とは神秘的な存在ということですよ。

● 遺れる者

あなた方は、遺れる民です。

「遺れる者」

というのはイザヤ書にある言葉です。終りまで耐え忍び遺れる者は神の祝福を受ける。遺れる者はまた選ばれたる者、選びの器です。神さまの民は遺れる民、遺民なんだ。あなた方は遺れる民です。

「ヤコブの家よイスラエルのいへの遺れるものよ、腹をいでしより我におわれ、胎をいでしより我にもたげられしものよ、皆われにきくべし。なんじらの年老るまで我はかわらず、白髪となるまで我なんじらを負ん。我つくりたれば拾ぐべし。我また負いかつ救わん。」(イザヤ46・3～4)

非常に慰め深い言葉です。ここに「遺れる者」とある。イザヤ書というのは素晴らしい所ですから、時々読まないとい。

「海にうかぶもの海のなかに充るものもろもろの島およびその民よ、エホバにむかいて新しき歌をうたい、地の極よりその頌美をたたえまつれ。」(イザヤ

42・10)

とある。

「エホバ勇士のごとく出たもう。また戦士のごとく熱心をおこし、声をあげてよばわり、大能をあらわして仇をせめ給わん。」(イザヤ42・13)

もうしかし、私は仇が、敵がいなくなつた。どこの人もみな兄弟姉妹です。

「敵を愛せよ」

というけれども、敵がいなくなつてしまった。

聖書は大変な本です、輝いています。みな天来の言だからね。

